

第15回 世田谷区子ども読書活動推進フォーラムの報告

「いまこそ、昔ばなしを！」

令和3年1月30日（土）

於：教育センター ぎんが

世田谷区立中央図書館

第15回世田谷区子ども読書活動推進フォーラム

「いまこそ、昔ばなしを！」

実施概要

- (1) 実施日時 令和3年1月30日(土) 13時30分～15時30分
- (2) 場 所 教育センター「ぎんが」
- (3) 参加人数 48名
- (4) 内 容 第1部 講演「いまこそ、昔ばなしを！」
講師：小澤俊夫氏（小澤昔ばなし研究所所長）
第2部 質疑応答

目次

開会挨拶	…P. 2
第1部 講演	…P. 3～14
第2部 質疑応答	…P. 15～26

小澤俊夫氏プロフィール

1930年生まれ。小澤昔ばなし研究所所長、筑波大学名誉教授。日本女子大学教授、筑波大学副学長、白百合女子大学教授を歴任。1992年より日本各地で昔ばなし大学を主宰。また季刊誌『子どもと昔話』を刊行し、独自の昔話研究と実践を展開。昔話本来の語り口に基づいた昔話集『子どもに贈る昔ばなし』（小澤昔ばなし研究所）シリーズの刊行にも力を入れている。主な著・訳書に『グリム童話集 200歳—日本昔話との比較』、『昔話からのメッセージ ろばの子』、『改訂 昔話とは何か』、『小澤俊夫の昔話講座①入門篇 こんにちは、昔話です』、『ときを紡ぐ 昔話をもとめて』上下巻（以上小澤昔ばなし研究所）、『昔話の語法』（福音館書店）、『グリム童話の誕生』（朝日新聞社）、『ヨーロッパの昔話 その形と本質』（岩波書店）等。2007年ヨーロッパ・メルヒェン賞（ヴァルター・カーン財団）受賞。2011年ドイツ・ヘッセン州文化交流功労賞受賞。2020年児童文化功労賞受賞（日本児童文芸家協会）。

第15回世田谷区子ども読書活動推進フォーラムの開催にあたって

中央図書館長 谷澤真一郎

開催にあたりまして、一言ご挨拶させていただきます。

本日はお忙しい中、フォーラムにご参加いただき、誠にありがとうございます。

この「世田谷区子ども読書活動推進フォーラム」は、日ごろから子どもたちの読書活動の推進に取り組まれている方や関心のある方などに参加していただき、子どもの本の魅力を再認識し、子どもの読書環境づくりにいっそうの理解を深めていただくことを目的として開催しています。平成19年に第1回が開催され、今回で15回目となりました。

講師を務めていただく小澤俊夫先生は、みなさんもよくご存じだとは思いますが、昔話の研究者です。昨年、コロナ禍における昔話の力と子どもの成長についてのインタビュー記事を拝読し、とても感銘を受け、「ぜひ、小澤先生のお話を拝聴したい」と思い、講演をお願いしたところ、快くお引き受けいただきました。

グリム童話の研究からはじまり、その後、日本の昔話の分析的研究を行い、昔話全般の研究が続けられています。1998年には、独自の昔ばなしの研究と実践のために「小澤昔ばなし研究所」を設立し、99年には、季刊誌「子どもと昔話」を刊行するなど、昔話の研究と語りの現場を結びつけることに尽力されています。

主な著書に「昔話からのメッセージろばの子」や「改訂昔話とは何か」「ときを紡ぐ昔話を求めて」など、多数出版されています。

また、1992年からは、全国各地で「昔ばなし大学」を開講され、現在も精力的に全国をとびまわっていらっしゃいます。そんなお忙しい中、今日はお越しいただきました。ありがとうございます。

今日は、「いまこそ、昔ばなしを！」をテーマに、むかしばなしが、子どもたちの心の成長にどのようにかかわるのか。特に、このコロナの時代にこそ、どのように影響し、そして、なぜ今必要なのかなどお話いただき、フォーラムの後半は、みなさんで語り合いたいと思います。

【 第一部 講演会 】

こんにちは。小澤俊夫です。貴重な時間なので、いきなり本題に入ります。

まず最初に、質問をさせていただきます。「昔話はどこにありますか」と聞いたら、皆さんは何を思い浮かべますか。人によっていろいろだと思いますが、絵本に書いてあると思う人、あるいは昔話本に書いてあると思う人、テレビに出てくると思う人もいるでしょう。けれど、私は田舎へ行って、おじいちゃんやおばあちゃんからたくさん話を聞くというのを20年ぐらいやっていますが、その実感からすると、昔話が本当にあるのは、それが語られている時間の間だけなんです。昔話は語られている時間の中にだけ存在する、これが一番大事なことなので、ぜひ覚えておいてください。ということは、終わったら消えてしまうということです。1回きりのものなんです。もう気がついた人もいると思いますが、音楽も同じじゃないですか。音楽も生は1回きりのもの、だから、音楽と昔話はとても似ています。それも後で触れることになると思います。

昔のおじいちゃん、おばあちゃんたちが田舎で子どもたちに聞かせていたとき、主に聞いている聞き手は子どもなんです。子どもにしてみれば、耳で聞くだけなんです。でも、それでお話が分からなければ駄目。だから、語るほうは、子どもが耳で聞くだけでも分かるように語っています。耳で聞いて分かりやすいように語ってきました。ここが大事な点です。逆に言うと、目で読まれてきた文章ではないということです。目で読まれて分かるような文章ではない、目で読むための文章で

はないということです。ここを強調したい。

今、世の中で本として昔話が出た場合、大抵その文章をつくる方は児童文学関係の方が多いです。例えば児童文学者もいますが、ふだんは創作をしています。ということは、読まれる文章を書いているわけです。昔話は読まれてきませんでした。聞かれてきただけなんです。だから、僕が目から見ると、本になっている昔話は読まれる文章がとても多いです。

皆さんの中にも、子どもにお話を覚えて語る方がいっぱいいると思いますが、そういう方は一生懸命それを覚えて語るわけです。私にはちょっと気の毒だなという気がするんです。だって、読まれる文章だから、語る文章ではないから、形容詞が入ったり、修飾語が多かったりして立派過ぎるのです。昔話はもっと単純明快です。そういうものを選んでほしいし、そういう昔話を書けるように指導しています。要するに、昔話は言葉なんだから、言葉が大事なのです。

今日は約60分時間をいただいているので、これから、1つ私が語りますから聞いてください。これは、宮城県の佐々木徳夫という僕の親しい昔話研究者のお母さんが語った「やまんばの話」です。とてもいい語りだったので、佐々木徳夫の許可をもらって私が共通語にし、福音館書店で絵本にしました。今日はこのお話をきいてください。

昔、ある村に1人の馬方がいた。ある日のこと、浜へ行って魚をたくさん仕入れて、馬

の背に振り分けに積んで峠の道を帰ってきた。日が暮れてあたりが暗くなると、松の木の陰からやまんばが飛び出してきて、「これっ、待て。その馬の片荷を置いていけ。置かなきゃおまえを取って食うぞ」と言うので、馬方は馬の片荷を後ろへ投げて、馬を引いてわらわら逃げていった。やまんばはその片荷をバリバリ食っちゃうと、すぐまた追いかけてきて、「これっ、待て。その片荷をもう一つ置いていけ」、馬方はもう一つ荷を投げて、やまんばはその荷の魚をバリバリ食っちゃって、それですぐまた追いかける。「これっ、待て。その馬の足を1本置いていけ。置かなきゃおまえを取って食うぞ」と言うものだから、馬方は馬の足を1本ぶった切って、それと後ろへ投げて、3本足の馬に乗ってガッタガッタガッタと峠の道を逃げていった。したらば、やまんばはその馬の足もバリバリ食っちゃうと、すぐまた追いかけてきて、「これっ、待て。その馬の足をもう1本置いていけ。置かなきゃおまえを取って食うぞ」と言うものだから、馬方は馬の足をもう1本ぶった切って、2本足の馬に乗ってガッタガッタガッタ峠の道を逃げていった。やまんばはその足もバリバリ食っちゃうと、すぐまた追いかけてきて、「これっ、待て。その馬の足をもう1本置いていけ」と言うもので、これはもう到底逃げおおせるものではないと思って、馬方は馬をそこに置いて、わらわらやぶを越えて逃げていった。

したらば、沼があって、その沼のほとりに高い木があったものだから、木によじ登って、上でじっと隠れていた。やまんばは馬をバリバリ食うと、すぐ追いかけてきて、その沼の

ところまで来ると、沼の水の中に馬方の姿が見えたものだから、「おめえ、そんなところに隠れたって駄目だぞ」といって沼へドボンと飛び込んだ。それを見て、馬方は木からするする下りてきて、またやぶを越えて、山の中へ逃げていった。

したらば、うまいことに小屋が1軒あったもので、これはいい隠れ家だと思って小屋へ飛び込んで、はりに上がってじっと隠れていた。しばらくすると、何とさっきのやまんばがずぶぬれになって入ってきて、「おお寒い、寒い。今日は魚をいっぱい食って、馬を丸ごと食って、腹いっぱいになった。どれ、甘酒でも沸かして飲むか」といって、鍋に甘酒を入れて、いろりで沸かし出した。自分はあると背中を向けて背中あぶりを始めた。甘酒がちょうど沸いてきた頃、やまんばはクラン、クランと居眠りを始めた。それを見て、はりの上の馬方は、屋根のカヤを1本抜いて、甘酒をツッパツッパと吸っちゃった。したらば、やまんばは目を覚まして、「俺の甘酒飲んだやつは誰だ」と叫んだ。はりの上の馬方はちっちゃい声で「火の神、火の神」と言ったらば、「火の神様が飲んだんじゃしょうがない。どれ、餅でも焼いて食うか」と言って、今度は餅を3つ持ってきて乗っけて、自分はまたあると背中を向けて背中あぶりを始めた。そのうちにまたクラン、クランと居眠りを始めたもので、はりの上の馬方、さっきのカヤで餅をツクンと刺しては食べ、ツクンと刺しては食べ、3つとも食べちゃった。したらば、やまんばは目を覚まして、「俺の焼き餅を食ったやつは誰だ」と叫んだ。はりの上の馬方、小さい声で「火の神、火の神」と言ったらば、

「火の神様が食ったんじゃしょうがない。どれ、寝ることにするか」と。木の唐櫃に入って寝るか、石の唐櫃に入って寝るかど独り言を言うから、はりの上の馬方は小さい声で「木の唐櫃、木の唐櫃」と言ったらば、「火の神様がおっしゃる。じゃ、木の唐櫃にするか」といって、木の唐櫃に入った。それを見て、馬方ははりから下りてきて、もみぎりを持ってきて、その木の唐櫃にキリキリ、キリキリ穴を開け出した。やまんばは、「明日は天気だか。キリキリムシが鳴いてら」なんて言うんだけど、構わずキリキリ、キリキリ穴を開けて、穴が開くと、熱湯を持ってきて、その穴から熱湯を注ぎ込んだ。したらば、やまんばは、「このネズミやろう、しょんべんなんか引っかけやがって」なんて言っていたけれど、構わず熱湯をどんどん注ぎ込んでいったら、しまいにはやまんばは、「熱い、熱い、助けてくれ、助けてくれ」と叫んだけれど、馬方、「俺の大事な馬と魚を食ったかたきだ」と言って、熱湯をどうどうと注ぎ込んだので、やまんばはとうとう死んでしまったと。「こんでえんつこもんつこさけた」

といって終わるんです。(拍手)
最後の「こんでえんつこもんつこさけた」というのは、結末句と呼んでいますが、この話はおしまいという最後の挨拶です。「昔、昔あるところに」と始まるのに対応して、「こんでえんつこもんつこさけた」とか、地域によって違います。「とうびんと」なんていうところもあるし、「どっとはらい」というところもあるし、いろいろです。結末句を調べるだけでもとてもおもしろいんですが、その話をする



と長くなるので、今日はやめておきます。

今の話はどうでしょうか。一番ショックなのは馬の足を切ったところ。それでも馬は平気で走っていました。そこが昔話なのです。どうしてそういうことが可能なのかというのをちょっと解説します。

まず最初のところからいきますが、馬方が1人でいました。そこにやまんばが出てきました。やまんばと馬方の1対1の場面になりました。昔話の場面は常に1対1で構成されました。最初の文法です。一番それがはっきりしているのです。3者入り乱れてですと、場面がよく分からなくなってしまいます。1対1だと一番はっきりしている。シンプルでクリアです。いろいろな昔話を思い出してみてください。ほとんど1対1でできています。

それから、もう一つ最初のところで、やまんばと馬方の間で言葉が通じています。「これっ、待て」なんて、通訳なしで言葉が通じています。そのところ、つまりやまんばというのは人間じゃない、あちら側の世界、妖怪です。それと人間との間に次元の違いがないということが言えます。そういう意味で、僕たちは次元性と言います。昔話の持つ次元性です。これは幾らでも例を挙げられる。例えばグリム童話1番、『かえるの王さま』と

いう有名な話の最初の場面、王女が、金のボールが泉に落ちこちたので泣いていると、かえるが現れて、「王女様、何で泣いているんですか」と言う。王女「私の金のボールが落ちこっちゃった」、かえる「もし私が拾ってきてあげたら、どうしてくれる？」などという話をするところです。いきなりああいう会話に入ってしまいます。変です。常識的に言えばおかしいです。常識的に言えば、王女が最初に発すべき言葉は、「あんた、どこでドイツ語習ってきたの」と聞かないといけません。それを言わないわけです。当たり前のように話します。これも次元性と言います。

それから、荷物を取られたり、問題のところは馬の足です。馬の足を1本よこせ、馬の足をぶった切って、それと後ろへ投げて、馬方は3本足の馬に乗って走っていきます。ここはすごいところです。まずは、3本足でも平気で走れます。昔話は写実的に語ろうとしていません。抽象的に語っていて、写実でない語り方です。そして、問題は馬の足を切っても、馬は痛いとも何とも言わず、血も流さないで、そのまま3本足で走っていくところです。馬の足を切っても馬は倒れていない、そこが写実的ではないです。もし写実的に語るなら、馬の足を切ったら、当然馬はひっくり返りますが、2本切られてもひっくり返りません。どうして可能かということです。皆さん、紙細工で4本の足の馬の姿を作ってください。そのうちの馬の足を1本はさみで切ってください。3本になったでしょう。ですが、切り紙細工だから血は流れていないでしょう。馬の形は全然崩れないで、足が3本になっただけの話です。ということは、昔話は

図形的に語る、立体的に語らないということです。

いきなりそんなことを言われても分かりにくいかもしれませんが、いい例は「白雪姫」です。白雪姫は3回殺されますが、それは御存じですね。1度目はひも、2度目はくし、3度目はリンゴで殺されますが、「白雪姫」の語り方も今のと同じです。1度目はひもで殺されて倒れています。夜になって小人たちが帰ってきて、白雪姫の倒れている姿を見て、胸のひもを切ってあげると、ぱっと生き返ります。ということは、窒息はしていなかったということです。もし窒息していれば、ひもを切っても生き返らないはずですが、それがひもを切ったら生き返ったということは、写実的に窒息という生理現象は語っていないということです。2回目はもっと分かりやすいです。髪の毛に毒のくしを刺されて、ぼったり倒れました。いかにも毒が効いたみたいに聞こえますが、夕方、小人たちが戻ってきて、その毒のくしを抜いたら、ぼんと生き返ったのです。毒は効いていなかったという話で、毒が効いていけば生き返るはずはないです。

今、1回目と2回目の例を出しました。まず1回目で言いますと、白雪姫の美しい姿を邪魔していたひもを取って、元の美しい姿が回復したら生き返った。姿、形が問題だったのです。2度目のくしはもっとはっきりします。毒のくしを抜いたら、ぼんと生き返るということは毒は効いていなかったということです。ここも同じです。白雪姫の美しい姿をくしが邪魔していた、刺さって出っ張って、形が崩れていた、壊されていた。その形を回復したら、生き返ったということは、さっき

の馬方と同じで、形が大事です。

白雪姫はもう1回殺されています。3回目は手が込んでいます。毒のリンゴを食べてしまい、生き返らなかったけれど、小人たちは彼女を埋める気にはならず、ガラスのひつぎに入れて山の上に安置しておきました。そこへ王子が通りかかり、愛を感じてもらい受けて、召使がガラスのひつぎを担いで山を下って行きました。下っていく途中に、召使の一人が木の切り株に足を引っかけてガタンと揺れました。揺れた途端に喉から毒のリンゴがぼろっと外れて生き返ったというのです。知っていますか。知らなかったら、必ず読んでください。読まなければおもしろくないです。本当にあほみたいな話です。

私は若いときからグリムをやっていますが、最初にあそこを読んだときにはまだ学生だったのですが、理屈は全然知らないから、おかしい話だと思いました。毒のリンゴが喉から外れたら生き返るのか、これは何だと思いました。でも、今から考えると、それが昔話です。ここも形です。毒のリンゴというから、毒のほうに気を取られますが、毒のリンゴが喉に引っかかっていた、それが喉から外れてぼろんと外に落ちました、そうしたら生き返りましたということは、毒は効いていなかったという話です。喉に毒のリンゴが引っかかって、喉の形を邪魔していました。壊していました。リンゴが外れて、喉の元の形が回復したら、生き返りました。形が大事だったということです。白雪姫の3回の殺人未遂事件は、3回とも同じ原理で語られていて、そう考えると、とても見事です。

馬方の話に戻ります。馬方もそれと同じ語

り方をしています。馬の形が問題だったのです。馬方は馬を置いて逃げていきます。隠れ家だと思って小屋へ飛び込んだら、ちょうど彼が隠れている小屋がやまんばの隠れ家、住まいだったということです。この一致も昔話の大事な性質です。いろいろ一致させます。今の場合、隠れ家だと思ったのが、やまんばの住まいだったという場所の一致です。

一致にはいろいろな一致があります。まず時間の一致、場所の一致、状況の一致、条件の一致です。一致というのは昔話のとても大きな大事な性質です。1つ例を挙げます。「いばら姫」、グリム童話です。あれは100年の眠りに落ちると予言されて、それで100年の眠りに落ちてお城の中で眠っています。うわさを聞いて、いろいろな国の王子が眠っている美しいお姫様を見ようと思って行きますが、みんなイバラに引っかかって死んでしまいます。ところが、100年たったときにある王子が行くと、イバラの道をばんと開いてくれて、中へ入れた。細い階段を上がっていくと、ドアがあり、古い鍵をぐっと回したら、ドアがぼんと開いて、中にお姫様が眠っていました。王子は、美しいお姫様なので思わずキスをしたら、目を覚まして、私はどこにいるの。それで、翌日には結婚してしまうのです。すごいです。100年眠っていてもすぐ結婚してしまうのです。ちょうど100年の時間が切れたときに行っているわけです。

私は若い頃、修士論文はグリム童話をやり、その後、グリム童話のいろいろな細かいことを調べ始めたのです。そのうちに今の問題に引っかかってしまいました。あそこでいばらひめが目を覚ましたのは、100年の時間切れ

か、それとも王子のキスによるのかという問題です。これは難しかったです。

昔話の研究は、事例がなければいけませんから手間がかかります。勝手に考えてはいけないので、事例で証明しなければいけない。僕はドイツ語なものですから、ドイツ語、英語、フランス語の文献は調べました。ところが、どれもはっきり言わずに、何となく目を覚ましているのです。特にフランスの話の場合は、割とキスによってが多いです。フランス人はキスが好きなのかもしれません。ドイツのはどちらにも取れる。英語もどちらにも取れる。論文が書けなくなって、引っかかっていたのです。そのうちに、マックス・リュティというスイスの文芸学者の理論書に偶然ぶつかって、それを読んでみますと、今のことをストレートには言っていないですが、そこは一致だというわけです。時間の一致、そして条件が一致した、その一致にメルヒェンらしさがあるのだという彼の理論です。それに会って、私は本当に目が開けたのです。早速翻訳して、今それは岩波文庫に入っていますので、興味があったら読んでください。マックス・リュティの『ヨーロッパの昔話 その形と本質』という本です。リュティが言うには、時間の一致、条件の一致、それでメルヒェンらしさ、要するにおとぎ話をつくっているという理論です。それで納得して、論文が書けるようになったわけです。

今のは非常に分かりやすい例です。時間の一致、場所の一致、その一致ということで見ると、日本の昔話もたくさんそういう例が出てきますので、おもしろいです。

マックス・リュティの『ヨーロッパの昔話』

岩波文庫はお勧めです。かなり難しい論文ですが、昔話を知っていて読むと分かりやすいです。知らないで読んだら分からないです。ぜひ読んでみてください。時間の一致ということをお話しました。

先ほどの馬方へ戻ります。いい隠れ家だと思って飛び込んだら、それがやまんばの住まいだった、これが場所の一致になります。甘酒を沸かしているうちにやまんばは眠りました。馬方は屋根のカヤを抜いてツッパツッパと吸っています。2度目のときには餅を焼きました。馬方は、さっきのカヤで餅をツクンと刺しては食べ、ツクンと刺しては食べ、同じカヤを2回使っています。これもリュティの理論に出てくるのです。昔話は同じもの、同じ言い方、同じ場面を何度も使う、それをリュティは経済性と言っています。同じもの、古いものを活用するわけですから、昔話の持つ経済性だと言うわけです。おもしろいです。そう言われると、昔話の中に、同じ言葉を繰り返すとか、同じものを何回も使うというのはたくさん出てきます。

もっと言えば、音楽もそうです。音楽を思い出してください。同じメロディーを2度使わない音楽はないです。シューベルトの子守歌でも、今の子どもが歌っている歌でも何でもいいです。同じメロディーを2度使わない音楽はない。別な言葉で言えば経済性ということです。音楽と昔話の話をする、それだけで時間になってしまうので、あまり深入りしませんが、音楽と昔話はそういう意味でも似ています。

せっかく「白雪姫」の話をしたので、今の経済性と絡めて、「白雪姫」にもう少し触れま

す。白雪姫が3回殺されたのを全訳で読んでみてください。1回目、2回目、3回目、ほとんど同じ言葉でグリムは書いています。とても見事です。「白雪姫」を詳しく見ると、1度目がひも、2度目がくし、3度目がリングで、生き返りませんでしたから、王子と結婚できました。よく読んでみると、3回目のリングで殺されるところまでは、グリムはほとんど同じ言葉で語っています。ここで生き返りませんでしたから、王子が現れます。ここからは別になるのです。

長さに注目してください。1回目と2回目はほとんど同じ長さです。3回目もリングで殺されるところまではほとんど同じ長さです。3回目に殺された後、生き返らなかったのがあるから、長いのです。別な言葉で言えば、3回目にアクセントが置かれていると言えます。どういうアクセントかというと、タン、タン、タン、1、2、3、こういうリズムです。もうわらべうたをやっている方はすぐ気がついたでしょう。わらべうたはほとんどそうです。子どもが遊ぶとき、けんけんぱ、皆さんも子どもの頃にやらなかったですか。1、2、3。3にアクセントがある、あのリズムです。「白雪姫」も実はそのリズム、けんけんぱです。長いから気がつきませんが、縮めて言えば、けんけんぱ、同じリズム、3回目にアクセントがあります。

「白雪姫」のリズム形は、音楽とほとんど同じ形です。音楽でバーフォームと呼ばれているもので、2小節、2小節、4小節という音楽のつくり方です。メロディーのつくり方で、これは古典的な形です。有名なので言えば、例えばシューベルトの子守歌を皆さん知

っているでしょう。「眠れ、眠れ、母の胸に」です。「眠れ」、2です。「眠れ」、2です。「母の胸に」、4です。2、2、4の形です。これをバーフォームと言います。

中世のヨーロッパに吟遊詩人と呼ばれる人たちがいました。今の言い方で言えば、シンガーソングライターです。バーフォームというのは、その人たちがとても好んだメロディーの形だそうです。それがヨーロッパの音楽の歴史の中で復活しまして、特にドイツのロマン派の人たちがこの形をととても好みます。シューベルト、ブラームス、シューマンなどはこの形をととても好みます。歌以外の器楽曲もそうですけれど、2、2、4、この形がととても多いのです。ベートーベンをよく聞いていると、ソナタでもこの2、2、4は出てきます。音楽をやる方はこの2、2、4を頭に置いてみてください。たくさん出てきます。

今言ったシューベルトの子守歌は一番典型的な例です。どこを強く歌うかということ、「眠れ、眠れ、母の胸に」の「母の胸に」あたりを一番強く歌えと教わります。ここに一番アクセントが置かれていて、さっきのタン、タン、タン、これがここに当たるわけです。

音楽と昔話というのは、最初にお話ししたように、両方とも耳で聞かれてきたものです。ですから、性質が非常に似ています。音楽を聞いたり、やったりする方は、どうぞ昔話と結びつけて考えてみてください。そのことを詳しく『昔話の語法』(福音館書店)という本で書いたことがあります。その第5章を昔話と音楽として、詳しく、いろいろな例を挙げました。音楽のことをやると時間がかかってしまうから、ここでやめますが、興味があっ

たら読んでみてください。

さっきの馬方へ戻って、最後のところです。2度使うと言いました。経済性です。そして、やまんばは最後、殺されて終わるわけです。やまんばというのは、今の話では怖い存在になっています。日本の昔話では怖いものの代表のように言われますが、実はこのやまんばの話も長い話があって、もともとは日本人の自然信仰です。日本人が御神木と言ったり、キツネが神様だと言う、自然信仰です。やまんばもそういう長年の中で出てきたのです。やまんばだけでも、これをやり出したら切りがないので、今日はやめますが、今は怖いものになっていますけれど、とてもおもしろい存在で、決して怖いだけではありません。

昔話には、こういうはっきりした語りの形がある、文法があるということを知ってください。そして、もし興味があったら勉強してください。一番分かりやすいのは、先ほど言った福音館書店で出した『昔話の語法』が一番完全です。もし『昔話の語法』を読んで興味が出たら、さっき言ったマックス・リュティという人の『ヨーロッパの昔話』という岩波文庫を読んでいただくといいです。要は、なるべく昔話の形を壊さないで子どもたちに伝えてもらいたいと思います。壊さないでという意味のもう一つは言葉遣い、決してきれいな児童文学ではないということを知ってください。馬方の話のように、ぶっきらぼうです。描写なんかしない、出来事を語っていくわけです。興味があったら聞いてください。それで勉強していただくといいです。

ここからメッセージの問題に移ります。私はラジオでも話しています。FM FUKU

OKAという福岡のFM放送なのですが、世界中で聞けます。パソコンで「FM FUKUOKA、小澤俊夫」と検索していただくと私の番組が出てきます。もう10年もやっていて、いろいろな例で説明しています。そういうのを勉強して、子どもが聞いて分かりやすい、いい形の文章で子どもたちに語ってあげてください。

ここから子どもたちへの語りの問題に行きます。まず結論から言いますと、皆さん、どうぞ、自分の生の声で子どもたちにお話を聞かせてあげてください、ここに尽きます。あるところで、私は毎晩聞かせていますというお母さんがいらしたのです。いいですね、どうしているのですかと言ったら、市原さんの朗読をCDで聞かせていますと言うので、それでは駄目です。私が言うのは生の声です。上手に語れなんて言っていません。下手でいいのです。皆さんの生の声で聞かせてあげてください。それはもう絶対です。

市原さんは、僕も知っていますが、あれは仕事で技術ですから、あんなふうに語る必要は全くありません。皆さんが子どもに普通に語りかけているお話、今日こんなことがあったのよと話す、その話し方で結構です。それで聞かせてあげてもらいたいです。昔話は、もちろん本を読むのでもいいですが、できれば、短い話でいいから、覚えて語ってあげたらなおいいです。

覚えてというと、皆さんすぐ昔の入学試験のことを思い出してしまうかもしれない。試験のときに丸暗記した覚え方ではありません。昔話を覚えるというのは、そうではなくて、場面を見ることです。場面を覚えること、

場面をしっかりと頭の中に入れること、そして登場人物のせりふだけはきちんと覚えること、それでできます。例えばさっきの「うまかたやまんば」で言えば、最初のところで、馬方が馬に魚を乗せて峠の道を上っていった、そこへやまんばが出てきた、その場面をちゃんと頭の中に入れておいて、あとはせりふだけを入れます。「これっ、待て。その馬の片荷を置いていけ」というせりふを入れればいいです。どうぞ文章を丸ごと覚えようなんて思わないでください。場面を覚えてください。

それは私が勝手に言っているのではなくて、鈴木サツさんという本当にすばらしい語り手が岩手県遠野にいたのです。もう亡くなりましたけれど、その方が、私は語るときに、私が語っている場面を見ながら語っていると言っていました。語り手がです。そのとおりでと思います。場面がはっきり頭に入っていればいいのです。子どもたちに声で聞かせてあげてください。もし覚えられなかったら、もちろん読んで聞かせてもいいです。だけれど、立派な俳優さんのCDがいいなんて思わないでください。皆さんの生の声が大事です。

声というのは不思議なもので、いつまでも耳の中に残るでしょう。皆さん、そういう経験があるでしょう。亡くなったおじいちゃんの声が今でもよみがえるというあれです。声というのは、見えないだけに深く残るのです。子どもたちの一生を支えるような声を届けてあげてください。上手に語る必要は全くないです。ただ、お話だから、ある程度覚えていないと、聞いていてつまらないから、ある程度覚えるのは子どもに対する責任だと思いません。覚えるときに、さっき言った場面を覚え

てください。大事なせりふだけをきちんと覚えておく。そんなに難しくないです。特に今のように、子どもにとってみれば、幼稚園に行こうにも閉鎖されていたり、小学校も閉鎖されているとか、行ってもお友達があまりいないとか、そういう孤立化されているときだからこそ、皆さんの生の声でお話を聞かせてもらいたいと思います。

今度は、お話の内容のほうになります。私は昔話が専門ですと言うと、道德、教訓の話ですねと言われることがあります。そういう話もないわけではないけれど、昔話は道德、教訓の話では決してないです。では、何だと言われたら、私ははっきり言うけれど、ほとんどのものは子どもの成長を語る話です。そういう目で昔話を見てください。

例えば3人兄弟の話とか、3人姉妹の話とかがよく出てきます。大抵は上のほうの子はできる子で、一番下の子はできない子でばかりにされていたけれど、話のストーリーの中では、最後には一番下の、一番駄目と言われた子が成功するという話が多いでしょう。つまり、お話の中では、3人兄弟の末っ子と言っていますが、子どもはそもそも世間の中の末っ子でしょう。子どもそのものが世の中の末っ子です。いろいろなことができないのです。それを昔話ではストーリーの中で語っているわけです。でも、できないけれど、何かのきっかけで力を発揮したり、恵まれたりします。恵まれるきっかけは何かというと、私の見るところ、多くの国の話で、動物への親切です。世界中の昔話で、動物への親切は必ず美德です。報われます。潰されそうになったアリを助けてあげたとかです。それを大抵一番下の

子、世間では駄目だと言われているような子がアリを助けてあげた、魚を助けてあげたということで、それで魚が恩返しをしてくれたり、あるいは運が向いてきたりという形になるわけです。世の中の一番弱い者が親切をすることによって道が開けてくる、これが世界の昔話の大きな流れです。

そのとき、それを、道徳だからその道徳を守りなさいというふうに受け取るよりも、個々の子どもの親切心、アリがかわいそうだなと思うとか、弱い動物が苦しんでいるのを見てかわいそうだな、助けてやろうと思う気持ち、そのほうが大事です。だから親切にしないさいねという教訓と取らないほうがいいです。

子どもたちというのは、世の中の子どもだから、末っ子なんだから、弱い立場です。そのときに大人が自分の声でいろいろなお話を聞かせてあげることがとても大事だと思います。特に今のような弱い立場の主人公が力を持っていく、そういうお話はとてもいいと思います。それを道徳だと取らないほうがいいです。だから、あなたもというふうに言う必要はないです。そうではなくて、そういうお話なのです。

私は、基本的に昔話というのは若者の成長する物語と思っています。道徳の話ではなく、子ども、若者が成長する話で、子ども、若者というのは必ず欠点があり、できないことはいっぱいあるけれど、そういうものを克服していく物語です。

その中で一番好きな話は「三年寝太郎」です。ばかみたいな話だけれど、とても好きです。あちこちで聞いたんだけど、よく覚えているのは、昔ある村に1人の若者がいた。

ちっとも働かないで怠けてばかりいるものだから、みんなからばかにされて、親からも「おめえ、働け」なんて言われていた。そうやって何年も過ぎた。あるとき、夜に、ハトとちようちんを持って隣の長者の家の松の木によじ登った。そして大きな声で叫んだ。「長者よ、よく聞け。我こそは鎮守の森の神様である。今夜はおまえの家の家運を予言しに来た」。長者は夜中に大きな声が聞こえたもので、何事かと思って縁側に出てみたら、真っ暗闇から声だけ聞こえてきた。「おまえの家の一人娘に隣の寝太郎を婿に取らなければ、おまえの家の家運はたちまち傾くであろう。では、余は鎮守の森に帰るぞ」と言って、寝太郎はちようちんに火をつけて、ハトの足に結びつけて、ぱっと放した。「では、鎮守の森に帰るぞ」と言った途端に火がじゅうっと鎮守の森のほうに飛んでいったもので、長者はすっかり本気にした。翌朝、起きると、一番に寝太郎のところに行った。まだ寝太郎は寝ていた。たたき起こして、「寝てる場合じゃねえ。鎮守の森の神様の御命令だから、ぜひうちの一人娘の婿になってくれ」と言われて、「じゃ、しょうがねえ。なってやるか」といって、寝太郎が長者の家の婿になったという話です。

これはとんでもない話でしょう。真面目に考えればとんでもない話、どうせ笑い話、笑って終わる。でも、この話がすごく好きなんです。考えてみたら、寝太郎が寝ていたのは若いときだけなんです。ある程度年を取ったときに、目を覚まして、ハトとちようちんを持って長者をだますという知恵を出しているわけです。だましていくが知恵を出しているというその構造、骨組みを考えてください。

主人公は、若いときは寝ていました。だけれど、あるときに知恵を出して自分の幸せを獲得していきましたといったら、これはほとんどの人の人生ではないだろうか。

皆さん、学校の時代を思い出してみてください。真面目な人もいるかもしれないけれど、ほとんどの人は学校は適当にやっていたわけです。隙あらばサボろうとか、隙あらば抜け出そうなんて適当に勉強していた。低空飛行でやってきた。だけれど、そういう人も、ある年になったら自分の人生をしっかりとついているわけです。今日集まっている方も、人生をしっかりとついている年齢になっている人ですが、その前のことを考えてみてください。私の長いこと大学の教師をやってきた経験では、「三年寝太郎」は若者たちの成長する姿です。学生時代は、親のための義理でやっているみたいなもので、みんな勉強しない。しょうがないなと思っていたけれど、卒業してみると、みんなしっかり社会でやっているわけです。もう「三年寝太郎」と同じじゃないですか。だから、「三年寝太郎」の話は、笑い話だけれど、実にはいい笑い話だと思っています。ほとんどの人の人生を語っています。

私は男兄弟4人ですけれど、我が4人兄弟はみんな寝太郎でした。だけれど、今寝ているやつはいないです。本当に「三年寝太郎」のとおりです。だから、昔話というのは、人生を語っている、子どもの成長を語っているものだと思います。なぜそういうことができるかという、昔話を伝えてきた人たちは、みんな大抵はおじいちゃん、おばあちゃんです。いろいろな人生を見てきているわけです。若いとき、どうしようもない怠け者だったや

つが、中年になったら澄ました顔をして村長さんをやっているのを見て、今のような話が出てくるわけです。昔話というのはロングスパンで人生を見ていますから、そこから読み取るものはたくさんあると思います。

でも、「三年寝太郎」を子どもに聞かせても分からないです。あれは思春期以後の物語で、そのくらいの年になった若者が聞けば分かるという話です。でも、小さい子にもそれぞれいい話がありますから、聞かせてあげてください。

私は今、日本の昔話とヨーロッパの昔話の動物の語り方、動物をどう語るかというテーマでずっとラジオでやっているのです。とてもおもしろいです。結論だけまとめて言うと、日本の昔話の中に出てくる動物は、猫とか、ネズミとか、その辺にいる動物が人間と関わるんです。とても自然です。だから、日本人にはとてもいいです。ヨーロッパは、グリム童話の動物もいろいろ拾い上げていますが、多くのものは、呪いをかけられた人間が動物になっています。呪いをかけられてカラスになった「七羽のからす」という話があります。ヨーロッパと日本では、動物の語り方がとても違います。その問題を今ラジオでもやっていますから、もし興味があったら聞いてみてください。

その意味では、子どもたちに聞かせるには、やはり日本の昔話が自然でいいなと思っています。だって、日本人にとって魔法の世界というのはよその話です。日本では魔法なんて言わずに、自然に変わっていってしまう。どうぞそういうお話を子どもたちに聞かせてあげてください。

もう1回言いますが、子どもたちにとって、

特に今のようなそれぞれが孤立化させられるときに、身近な大人が生の声で聞かせてくれるというのはとても大事なことです。

そして、もう一つ聞いてもらいたいのは、逆に子どもが今日学校であったことをお母さんに話したとしたら、それをちゃんと聞いてあげてもらいたい。ここをとても強調して言いたいです。子どもが自分の今日あったことを話したら、ちゃんと聞いてあげて、そして、ちゃんと返事してあげてください。黙ってうんうんとうなずいて聞くのももちろんいいですが、やはり声に出して、ああ、そう、そうだったの、ふうんと聞いてあげたほうが、子どもにとっては手応えがある、聞いてもらったという実感がする、それはとても大事だと思います。そして、子どもは、自分の話が大人に聞いてもらえていることが分かると、乗っていろいろしゃべる、それが大事です。言わなくてもいいようなことを言うかもしれないし、中にはフィクションも入るかもしれない、でっち上げもあるかもしれない。それでもいいではないですか。大人もフィクション、小説を読んでいるのだから、フィクションでも聞いてあげてください。子どもたちに、聞いてもらえているなど感じさせてあげてほしいと思います。

今の世の中、コロナという目に見えないもので、大人である皆さんにとっても不安な世の中だと思うんです。子どもにとってはもっと不安だと思います。私は戦争中に育った子です。敗戦のときに中学3年、真珠湾が始まったときに小学校5年でした。ですから、戦争をまともに、しかも立川だったからまともに空襲を受けました。今のこのコロナの状況

がとても似ているんです。というのは、当時、空襲というのは敵機がどこから来るか分からない、どこに潜んでいるか分からない、いつどこから来るか分からない。コロナもどこから来るか分からない。情報では、当時、甲府が爆撃されました、神戸が燃え上がりました、どこそこがやられましたという情報が入るわけです。今、どこそこがコロナでやられました、何県はコロナがこれだけ増えましたという情報がとても似ているんです。私にとってはアメリカの戦闘機と空襲警報と今のコロナの状態は、構造的には同じでとても似ています。ということは、子どもはとても不安だということです。どうぞ、大人が頑張ってください。大人がかばってあげてください。守ってあげてください。

私の記憶でも、敗戦は中学3年でしたけれど、中学1年、2年の頃、学校が閉鎖されて、僕たちは火薬工場へ送られたんです。私はいつ爆発するか分からない火薬をつくっていたんです。そういうときに、大人がいろいろ声をかけてくれて、私ら子どものことを気遣ってくれたというのはとても記憶に残っています。特に学校の先生が、学校は閉鎖されていましたが、心配して工場を回ってくるわけです。私はとてもうれしかったです。心細いから子どもにとっては大人が頼りなんです。どうぞ皆さん、こういうときだからこそ、子どもたちに声をかけてあげてください。そして、子どもたちの話を聞いてあげてください。それが大事だと思います。

このくらいで終わりにさせていただきます。どうも御清聴ありがとうございました。
(第一部終了)

【 第二部 質疑応答 】

小澤先生：頂いたこの紙（第1部講演会聴講者からの質問表）を主にして、これにお返事していく形で、なるべく答えるようにします。たくさん過ぎるぐらい頂きました。

質問A：「三年寝太郎」が思春期以降で分かる話とありましたが、幼い子に分かりやすい日本昔話のお勧めはありますか。

小澤先生：これは難しいんです。昔話は割と年齢が高いんです。いわゆるストーリーのある話、例えば「三年寝太郎」や「わらしべ長者」は小さい子には向かないです。小さい子に向くというと、私の感じではやはり動物の話です。いわゆるストーリー性のある話は小さい子には無理で、「ねずみのすもう」とか、「ねずみのおんがえし」とか、動物の話とさせていただくのがいいと思います。

具体的には、私が日本の昔話を今までまとめて出したのは、まずは福音館書店の『日本の昔話』という5巻本があるんですが、あれの中にも相当幼い子を意識した話を入れてあります。短い話で、ネズミなどの動物の話です。それを探するのはそんなに難しくないと思います。もう一つは、小峰書店で出していただいた『語りつぎたい日本の昔話』7巻本の中にも意識して幼い子向けを入れてあります。1つの巻にわざとまとめないで、ばらばらになっていますけれど、見れば分かると思います。

質問B：昔話を語る相手としては年齢制限はないと考えていいでしょうか。

小澤先生：年齢制限はないです。ただ、幼い子だとお話の内容が分かりにくいということがあるから、それは考えたほうがいいと思います。

質問C：いい昔話とそうでない昔話がありますか。

小澤先生：これは微妙です。好みの問題がありますから。私が言えるとすれば、余り教訓っぽい話はやめたほうがいいと思います。なぜかというと、そんな話を聞かされると、子どもたちは昔話が大体は嫌いになります。だから、教訓が入っているような話はやめたほうがいいと思います。

質問D：絵を見せながら語る昔話と素語りの昔話の語り方の違いはありますか。

小澤先生：それはあります。絵を見せながらというと、子どもが絵を見て楽しむ時間が必要で、その時間の配分を考えなければならないので、ちょっと違います。

質問E : 子どもたちに昔話をするとき、寝かしつけるときは別として、静かに、あるいはうとうと眠って聞いているときと、目を輝かして食いついて聞いているとき、大きな声で笑い騒いでいるときで、子どもたちにどんな影響や印象が残るのでしょうか。話の内容や子どもたちの年齢によっても違いがあると思いますが、教えてください。

小澤先生 : 要するに、寝かしつけるときとか、静かにしているときや、うとうとしているとき、大きな声で笑っているときでどのように受け取り方が違うかという話ですけど、受け取り方が違って当たり前です。意味がよく分からないけれど、子どもたちにどんな影響や印象が残るかは、そのとき、そのときのそれぞれの印象じゃないですか。親がそこまで気にする必要はないと思います。聞きたくなければ聞かないだろうし、大事なことは親がはっきり聞かせてあげることです。子どもは眠かったらあまり聞かないし、遊びたくてしようがないときに無理に聞かせられたら嫌ですね。そのあたりは普通の判断でいいんじゃないでしょうか。

質問F : 世田谷区の小学校などで読み聞かせやお話を語っていましたが、今は学校でこれらの活動ができません。生の声で語りたいと思いますが、どう学校などにアプローチすればいいのでしょうか。昔話の大切さをどうすれば先生方に伝えることができるのでしょうか。

小澤先生 : 伝えるのはものすごく難しいです。私も学校の先生をやったけれど、学校の先生の立場として、内容的にいいことを教えるというのがありますから、とても難しいです。昔話は必ずしも教育的にいいとは限らないです。けんかする話も、盗人の話もあるわけだし、あまり教育の場で活用しようと思うとかえって難しいです。家庭文庫とか、自由な場、家庭で聞かせるほうがむしろいい。

生の声で語りたいと思うというのはとてもいいです。生の声で語ってもらいたいと思います。

質問G : 3歳の娘が昔話の絵本を図書館で選んでくることがあります。これだけ絵本や本があふれている中で子どもが昔話に引かれるのはなぜですか。教えていただければと思います。

小澤先生 : 不思議だけれど、昔話は何か引く力があります。これはなぜだけれど、あります。これですとはっきり言えない。昔話は不思議な力がある、それでいいと思います。

質問H : 小学校低学年のクラスで絵本の「おならのしゃもじ」小沢正さんを読み聞かせたときのことで。男がしゃもじで馬などのお尻をなでたら、すごいおならが出るのですが、娘さんのお尻をしゃもじでなでた場面で1人の子が「わっ、セクハラ」と声を上げたのを皮切りに、全体がセクハラの大合唱になってしまい、困ってしまいました。このようなときはどのように。

小澤先生 : 大人も一緒にセクハラと言って遊んでいけばいい。そうだよねではないですか。目くじらを立てて考えることはない。そういう意味では、昔話って本当に際どい話がいっぱいあります。そのときに、こんなのおかしいねとか、こんなことをやったらおかしいよねとか普通の反応でいいと思います。あるいは、男の子が言ったら、「あんた、真似しないでね」とか、そういう普通の会話でいいです。目くじらを立てることはない。

質問I : 育児中です。本が大好きな子だったのに、高学年になり、11歳になって本を読まなくなってきました。ゲーム、テレビ、誘惑が多いようです。無理にでも本を勧め続けてよいものか、それとも本人の自主性に任せてよいものでしょうか。

小澤先生 : 子どもの自主性に任せる、それは当たり前です。読みなさいなんて言わないほうがいいです。かえって嫌いになります。子どもは変化しますから、あるとき離れるなんていうことは幾らでもあります。子どもは、小さいときは世界が小さいから、母ちゃんが言ったとおりのことでいいと思っていますが、友達との付き合いが広がったりすると、世界が広がります。だから、一旦そういうものから離れることはあります。放っておいてごらんください。しばらくすると、また戻って来たりします。大事なことは、お母さんなり、親なり、周りの大人が、絵本とか昔話が好きだということをはっきり示すことです。それは、あなたも好きになりなさいという意味ではなくて、お母さんがいつも昔話を読んでいたり、あるいはその話を断片的にもふだんしたり、にじみ出てくるのが大事です。あとは基本的には自主性に任せたほうがいい。子どもは変わっていきますから。

質問J : コロナ禍で図書館でのお話会が中止になっている場合、昔話語りや家庭内での1対1にならざるを得ませんが、子どもにとって昔話を生の声で1人で聞くことと、複数の人、子どもたちと一緒に聞くこととではその受け止め方や成長の仕方で何か違って来るような可能性はあるのでしょうか。

小澤先生 : これはありますね。1人で聞くのとみんなで見ると、両方あったらいいと思います。1人で聞くのももちろんいいですが、仲間と一緒に聞くのもまたおもしろ

ろいんです。自分が気がつかなかったことを誰かが大笑いしたりとして、そうかなんて思ったりすることもあるから、それは両方いいです。

質問K : 怖いやまんば、鬼などに向かっていく、退治していく話で、殺してしまう、死んでしまいましたというのが子どもの成長とどうつながると理解したらいいのでしょうか。向かっていく、退治する姿勢は大事という理解はありますが、その相手を死まで追い詰めるところが分かるようで、伝え方が難しいと思ったのです。

小澤先生 : 昔話には残酷なことがいっぱい出てきます。もしその昔話がリアルに語っていたらやめたほうがいい。大人は必ず事前に読むでしょう。さっきの馬方みたいに全く図形的なものはそのまま流せると思います。子どもは気にしないと思います。だけれど、リアルに殺していくような話だったら、やめたほうがいいです。私は全て何でもいいとは思わない。昔話でも、お話の種類によっても違うけれど、再話者、実際に文章にする人によっても違って来るから、あらかじめ読んで、もしリアルな本だったらやめたほうがいい。そういうことを趣味とする作家もいるから、そういうものも時々あります。

質問L : 乳幼児に最初に語って聞かせる昔話としてお勧めのお話、できれば、この本でというのがありましたら、教えてください。

小澤先生 : 乳幼児に最初に聞かせる話、これは案外難しいんです。昔話は年齢が高いです。私は、乳幼児の時代はむしろわらべうたのほうが良いと思います。わらべうたは、幼い子に向かってはとても有効です。この頃いい本が出ています。わらべうたは図書館にもいろいろあると思います。

質問M① : 子どもに昔話を語って聞かせ始める適齢というものはあるのでしょうか。お話を図形として捉えると考えると、ある程度世の中の物事を認識していないとお話に入り込めないのかなと思います。

小澤先生 : 図形として捉える考え方というのは、今日は勉強会だから、さっき皆さんにお話ししましたがけれど、昔話を聞かせるときにわざわざそんなことを意識する必要は全くないです。むしろ大事なことは、聞かせ始める適齢というものはあると思います。例えば2歳に面倒くさい話を聞かせると絶対分からないわけで、むしろわらべうたとかがいいわけでしょう。その適齢を見つけるのは親の役目です。人に教わるものではなく、やってみて、あるいは自分が読んでみて、これはうちの3歳の子には大丈夫だなと思えるかどうか、そこが親の力の見せどころです。親のほ

うだって教わってできるものではなく、そこは勉強してもらいたいと思います。例えば2歳の子にはこれと言っても、子どもの成長の仕方、速度が違います。3歳の子でやっとそれが分かる子もいるわけです。うちの子にこれがいいかどうかを判断する、それは親の判断だと思います。

親ではなくて、お話会みたいところでやるときは、いろいろな年齢の子がいるから、標準的に大体このあたりに狙いをつけてという、それは一種の経験値というか、勘というか、ですから経験はとても必要です。

質問M②：再話の利点やリライトする際に気をつけているポイントは何ですか。

小澤先生：すごくたくさんあるので、簡単に聞くなと。基本は、今日の初めのほうでお話ししたシンプルでクリアな文章ですが、そのシンプルでクリアをどう実現するかといったら、もう場所によって違います。

私は、実は昔ばなし大学というものを全国で20年以上やっていますが、その初級の勉強が終わった後、再話の実際の研究会をやっています。再話というのはリライトすることです。そこで細かい指導をしていますので、気をつけるポイントと言われても、一言では言えないですが、もしまとめて言うとしたら、考え方としては、目で読んでではなく、耳で聞いて分かる文章というのが基本です。

再話というのは、やるとすごくおもしろいです。その目で見ると、有名な作家の方々に全然よくないのはたくさんあります。児童文学が文学になり過ぎて、立派な文学になってしまっていて、耳で聞いては無理だというのはいっぱいあります。

質問N：私自身、親からも、祖父母からも、昔話を聞いた経験がありません。児童館もなく、学校での機会もありませんでした。先生のお話から昔話の奥深さや魅力を感じましたが、それをどう生かすのか正直分かりません。自分だけで楽しむものもありますか。

小澤先生：ありだろうけれど、自分だけで楽しむのはもったいないです。自分の子どもでなくても、周りの子どもたちに聞かせるという視点を持つと、選びやすくなりますか。

質問O：先生の書籍一覧に「となりのトトロ」や「崖の上のポニョ」などジブリの本が載っています。先生はジブリの物語にどのように関与されているのでしょうか。

小澤先生：私は、彼にも会ったこともないし、具体的に関与していません。ただ、私の目

から見ると、ジブリの作品というのは、昔話の文法と極めて近いです。彼は昔話の文法を知っているのではないかと思うぐらいです。「ジブリの教科書」という本にも書きました。図書館の方、「ジブリの教科書」というものは分かりますか。図書館に多分あると思います。その中に私は2回ぐらい書いていますので、見ていただくと、『崖の上のポニョ』とかは本当に昔話に近いです。彼が昔話の勉強をしたはずはないと思うので、考えられるのは、表現として突き詰めていくと同じになるということです。とても近いです。

質問P : 昔話や童話を研究されるようになったきっかけは。

小澤先生 : これは話し出すと切りがない、長いです。簡単に言いますと、私はドイツ語を勉強している中で、グリム童話はもちろん読みました。もう一つは、リヒャルト・レアンダーの『ふしぎなオルガン』というのを讀んだんです。岩波少年文庫に入っています。あの翻訳が出る前にドイツ語の授業として聞いたんです。似ているけれど何となく違うので、グリムのほうをやってくれた先生に、何で違うんですかと言ったら、先生が平気な顔して事もなげに「グリムは昔話だからな」とおっしゃったんです。私は、グリム童話というから、グリムさんが作った童話だと思っていたんです。アンデルセン童話はアンデルセンが作った童話ですから、グリムさんが作った童話だと思っていたら、昔話だと言われた。そのときに、昔話なら、民俗の集合的な色合いが感じられるかなと思って読み出したんです。図書館から原書を借りてきて、習い立てのドイツ語で字引を引きながら一生懸命、ほとんど読んだら、俄然おもしろくて、それでグリムをやろうと思ったんです。それが決定的です。

特におもしろかったのは、グリム193番「太鼓たたき」です。翻訳で読んでみてください。日本でいうと「天の羽衣」、水辺で女が衣を脱いで、その男が衣を盗んで、それで結婚してという話です。冒頭のところを見たらすぐ「天の羽衣」と分かります。それでびっくりしたわけですが。何で「天の羽衣」がドイツにあるんだろうと思ったわけですが。それで比較研究ということに興味を持ち出したんです。読んでみてください。

グリムの中で日本の昔話と同じ話があります。例えば「こぶとりじいさん」、すごく日本の話の感じがするじゃないですか。だけれど、あれは、「こびとの贈り物」です。他にも日本の昔話と同じものがいくつかあります。

質問Q : 先生の家庭でもお子さんに昔話を語ってあげたりしたのですか。

小澤先生 : 私は、子どもが小さい頃は自分では語れなかったけれど、でも、その頃、翻訳していたものですから、翻訳が仕上がったものを聞かせました。我慢強く聞いてくれました。下の子は2年生ぐらいだったけれど、終わりのほうに行くと、「で、結局結婚するんでしょう」なんて言って、もう分かっていたみたいで、そういう経験はあります。

質問R : 岩手県遠野の出身です。昔話も語りますが、その際、今は使わない言葉、例えばしゃべるは話す、何ぼでもは何度もとか、食べる、ねまるとか、すわるとか、ごしゃぐというような、そのまま使うのがいいのか、標準語で話すのがいいのか教えてください。

小澤先生 : 両方いいと思うんです。私は標準語という言葉を使わないんです。あれはやめましょう。標準語ではない、共通語です。日本では明治時代に、明治時代というのは中央集権国家をつくる時代だったので、例えば軍隊が青森の兵隊と九州の兵隊で言葉が通じないと困るから、言葉を共通にしたんです。だから、あれは標準語ではなくて共通語と言ったほうがいいと思います。標準語というのは言葉として差別語です。それから、私は方言という言葉も使いません。あれも、差別語だと思います。そうではなくて、土地言葉という言い方を提唱しています。

この質問でいえば、もし遠野の言葉を語れるならば、どうぞ遠野の言葉を使ってください。東京に住んでいても、周りの子はみんな遠野の言葉を知らない。でも、これから話す言葉は、おばちゃんが子どもの頃使っていた言葉なんだよ、聞いてと言って、聞かせてあげてください。そのときに方言なんて言わないでください。私の土地の言葉、私のお国の言葉で聞かせてあげてください。

なぜそれが必要かという、言葉が1つだと思いつくことは差別の第一歩です。言葉はいろいろだと思ふことが大事、言葉はいろいろあるものだということを理解することがとても大事です。もし遠野の言葉ができるのだったら、偽の言葉でないならば、これからおばちゃんが子どもの頃の言葉で語るから聞いてねと言って聞かせてあげる。偽の言葉はやめてください。それは言葉に対する侮辱ですから。

例えばNHKのテレビの芝居なんかで、よく鹿児島のお話を東京の俳優が鹿児島弁みたいな言葉でやります。西郷隆盛のときもそうでした。あれは絶対反対です。言葉に対する侮辱です。あのときだって、私は仕事で何度も行くから、鹿児島の人たちは、鹿児島弁みたいなことを東京の人がやっている、気持ち悪いとすごく

嫌がっていました。もし鹿児島言葉で芝居をやりたいなら、鹿児島の俳優を使えばいい。それを東京の俳優を使って鹿児島弁を2週間の講習会で習わせるなんてとんでもない。そういうのは強く反対です。土地言葉はとても大事です。しかし、偽の方言は強く反対です。だから、私の昔ばなし大学では、方言という言葉を使いません。土地の言葉と言います。それから標準語というのもし使いません、共通語と言います。

もう1回言います。もし岩手の言葉ができるのだったら、これは岩手の、私の子どもの頃言葉だからねと言って、純粋の岩手の言葉をお願いします。もしできるなら、その話を共通語でやるとこうなるのよと両方聞かせたら、なおいいです。偽の方言は絶対やめよう、日本語を大事にしよう、そう思います。どうぞ遠野の言葉を東京の子どもたちにも聞かせてあげてください。とても大事です。東京の子どもたちも、自分の毎日の言葉と違う言葉があるということを知ることはずごく大事ですから、どうぞ積極的にやってください。やっている人はいます。大平悦子さんとおっしゃる、遠野生まれで、今も遠野に住んでいるんだけど、東京にも住んでいる人が両方の言葉で話しています。それはとても素晴らしいです。

質問S : 他者と仲よく友達となるというテーマのお話でお勧めの話はありますか。あれば紹介してください。

小澤先生 : 他者と仲よく友達になる、いいですね。大抵の話はそうなっていて、大抵は大丈夫です。昔話は、出かけていくじゃないですか。知らないところへ行くでしょう。ということは、他者と知り合うわけです。そこで、戦ったり、理解し合ったりする。もういっぱいあります。必ずしも友達になるとは限らないけれど、他者と出会うというのが昔話の大きな分野です。僕らの人生はみんなそうじゃないですか。みんな人生はそうできています。皆さんも、今日、私という他者と出会っているわけでしょう。私にとってもそうです。それは人生の真実であって、昔話には幾らでも出てきます。大事なことは、昔話で主人公が出かけていく話が多いですねという質問かもしれないです。それはとても大事なことです、昔話の主人公はほとんど出かけていきます。

質問T : 昔話の本来の形をねじ曲げて、道徳的、教訓的な内容にしたり、アニメなど、分かりやすい形に変える例が多数あると思います。最初に出会う昔話は本物をと、忠実に再話される昔話を選んできました。しかし、現実的にはなかなか昔話との

理想的な出会いができる人は少ないのではないのでしょうか。間違った、あるいは多少違ったものなら、出会わないほうがよいとお考えですか。それとも、まずは興味を持ってもらうために、理想的ではなくても、出会うことが大切だとお考えのでしょうか。

小澤先生：理想的でないものにも始終出会います。誰だってそうじゃないですか。そんないい再話にいつも出会っていないです。大事なことは、いい再話か悪い再話かを見分ける力を持つこと、身につけること、それには勉強してくださいということです。自分で判断できるようになってほしいです。昔話の再話の文章としてよくないということは、要するに子どもに語る話としてよくないということですから、大事なことは、子どもにいい形でお話を伝えることです。それを語ってあげてください、読んであげてくださいとさっきから言っているわけです。そのときにいい文章であることが必要で、それは自分で勉強するよりしようがないです。

今、皆さんに勉強してくださいと私は言っていますが、どうするかというと、お話を聞くこと。例えばこの本のお話はどうか。例えば5人のグループだったら、1人が読んで、ほかの4人は聞いてみることにして判断すること。何を判断するかというと、聞きながらその場面が見えるかどうかという判断。見えなかったら駄目な文章です。これは初めは難しいかもしれないけれど、慣れるとできます。慣れが必要です。もっと言えば、ふだんから日本語に対して敏感であること、日本語に対して注意深くあることです。日常のこと、自分がしゃべるときにも、書くときにも、あるいは人がしゃべるのを聞くときにも、自分も相手もちゃんとした日本語でしゃべれているかどうか、そういうことに敏感になることが大事です。私の再話の勉強会では、1人では無理なので、3人以上のグループで再話をします。持ってきてもらって、それを耳で聞きます。耳で聞いて分かるかどうか。耳で聞いて分からなかったら駄目です。耳で聞くというのは一番大事なことです。聞けるような耳になること、耳を鍛えることは大事です。普通は日本語に対して注意深くなんて暮らしていないですが、そうではなくて、お話を子どもに伝えるわけですから、正確に伝えられる文章でなければいけない、それが正確に自分の耳で聞けなければいけない、いいか悪いか自分の耳で確かめられなければいけない、それにはやはり神経を使うべきです。お話に取り組むときには、お話は何といっても言葉ですから、言葉に意識的になってください。

質問U①：現実には、なかなか昔話との理想的な出会いができない人が少なくないんじゃないか。間違った、あるいは多少違ったものなら出会わないほうがよいとお考え

ですか。

小澤先生：そんなことを言っていたら、何にも出会えないです。周りには違うものが幾らでもあるわけで、大事なことは、こちらがそれを見分ける力です。

質問U②：それとも、まずは興味を持ってもらうため、理想的でなくても出会うことが大切だと考えますか。

小澤先生：そうです。初めから理想的なものなんてないのだから、大事なことは見分ける力、耳を持つこと、それにはいろいろなものに出会い、少し意識的に勉強するよりしようがない。

質問V：昔、鈴木サツさんのお話が聞きたくて遠野に通いました。初めはいろりを囲んでの少人数で聞くことができたのですが、大きな会館でマイクを通して聞くこともありました。なるべくなら生の声で少人数で語れたらよいと思いますが、マイクを通して昔話を伝えても、子どもたちにとって大丈夫なのでしょうか。

小澤先生：しようがないですね。もちろん生がいいですが、昔のようにいろり端でというわけにいかないでしょう。あるいは家庭だったらこたつでという場面ができるとは限らないですね。特に子ども会みたいところで話すときには、30人ぐらいの子どもになるわけで、これはしようがないです。そこで、どう語れるか、どういう話がいいか、どういう語り方が子どもたちに通じるかというのは工夫です。

私は田舎へ行って、随分お話を聞いてきたんですが、みんなやはりいろり端で聞いたとか、布団の中でおばあちゃんから聞いたとか、本当に体が接している感じですが、でも、そういう状況が今でもキープできるとは限らないです。今多いのは、子ども会などで20人、30人の子どもたちにということで、そこでどう伝えたらいいかと考えたほうがいいです。そのときにマイクでなければもちろんいいですが、マイクなしでといったら、人数は20人以下に限られてくるでしょう。ある程度のマイクはしようがないと思います。

僕は鈴木サツさんという遠野のすばらしいおばあちゃんに20年ぐらいついて歩いて、お話を聞いて感心したんです。もちろんいろり端でも語ってくれて、すぐそばでずっと聞きました。同時に、200人ぐらいの大きな会場でマイクを使っても彼女は語りました。そういうものは嫌だとは一度も言いませんでした。伝承的な語り手では、気難しい方で嫌だとおっしゃる方がいるんです。福島でそういうのは絶対に嫌だという人は現にいました。けれど、鈴木サツさんは平気で、しかも、きちっと語って、その精神力が偉いなと思いました。何百人でも平気で、しかも

語りは全然変わらない、すばらしかったです。

鈴木サツさんは、私は通い詰めたもので、188話、全部語ってくれたんです。それを『鈴木サツ全昔話集』という形で福音館書店から出してあります。これには活字だけではなくて、CDもついてます。岩手県の言葉で音も聞けます。もし鈴木サツさんに興味があるなら、ぜひ聞いてください。語りのリズムがよかったです。

質問W : ネックレス (※当日先生が身につけていらした) は自然信仰と関係がありますか。とても素敵だったので、質問しました。

小澤先生 : ありがとうございます。このことだと思うんですが、これは沖縄の数珠玉です。私は沖縄でも昔ばなし大学をやっているんですけど、今コロナで行かれないけれど、ずっと20年以上通っています。沖縄は今、辺野古の問題で苦しんでいるでしょう。なので、連帯を示すために、いつもこれをぶら下げているんです。気がついてくださってありがとうございます。

これで全部お答えしたと思います。時間も今3時半です。もし何か追加的に今思いついて、こういう質問がしたいという方がいらしたら、ちょっと時間をいただいて、もしなかったら、これで終わりにしましょうか。

質問X : 私は、今、先生の昔ばなし大学東京に参加しています。あと1回を残すのみです。先生は90歳になられると思うんですけど、元気の秘密は何ですか。

小澤先生 : 何だろう。4月に91歳になるんです。でも普通に暮らしています。強いて言えば、のんきな人間で、あまり細かいことを気にしない人間なんです。それなんじゃないかと思います。あと親からもらった健康な体としか言いようがないです。それと、昔話と出会って、昔話は尽きない勉強だから、幾ら勉強しても終わらないわけです。それを追いかけているものだから、なかなか人生が終わらないんじゃないですか。

今年の夏ぐらいに1冊本を出します。私は男兄弟4人で、一番上の兄貴は彫刻家だったんですが、早く亡くなりました。私が2番目で、3番目は音楽をやっていて、一番下は俳優です。居残った3人で我が家の思い出話、親のこととか、特に弟の音楽修行時代の話とか、私が一番詳しく知っているものですから、何回か鼎談をやりまして、それを本にして出します。もう言ってもいいと思うので、夏頃、岩波書店から出ますので、見てください。

もう一つは、これはまだいつと決まっていないんですが、昔話との付き合いが

長いものですから、昔ばなし大学が20年以上で、昔話との付き合いは二十歳ぐらいからですから、70年やっているわけで、それを振り返って本にまとめているんです。助けてくださる方がいらっしゃるからできるんですが、それも秋ぐらいになるかもしれません。そんなことをやっています。だから、終わらないのです。

もう一つ宣伝ですが、BSのTBSで日曜日、「むかしばなしのおへや」という番組がありまして、それは私の再話でやりますので、私の名前が出ます。小さな番組で、アニメです。若いアニメーターたちで、感じのいい絵なので、やろうということになったんです。毎回3話ずつやります。もしよかったら、見てください。

そんなことをやっているものだから、なかなか年を取る暇がなくてというわけです。ただ、今、このコロナで行けないものですから、こちらから出かけていく授業はしていませんが、幸いなことにZoomで勉強を続けているんです。あれは便利なものですね。しかも、勉強する方々が日本中です。皆さんのように女の子の方が多いですが、こういうコロナなんていう条件が悪い中でも勉強を続けられているんです。再話の勉強をこの間も北海道の人たちとやったし、九州の人たちともやったし、入門コースがあるんですけど、基礎コースというか、それも100人とか150人、到底できないと思ったんですが、実行委員が頑張ってくれて、できるんです。やっています。相変わらず勉強を続けているんです。

今日お集まりの方々もすごい方々だと思いますが、昔話の何がこんなに皆さんを引きつけるのかなと思うと、何といってもやはり子どもたちへの愛、子どもたちの健やかな成長に少しでも力になろうという気持ちだと思います。それともう一つは、昔話という伝承の文化、しかもこれは庶民でしょう。有名な人の文化ではないですね。庶民の文化を大事にしようというお気持ちだと思います。その2つで全国で続いています。すばらしいです。今日は初めてお会いした方がほとんどだけれど、もし興味があったら、私のラジオを聞いてください。さっき言いましたFM FUKUOKA、毎週やっています。かなり勉強しています。

というわけで、なかなか終わらないんです。勉強していますので、どうぞ皆さんも勉強を続けてください。今日の話はこれで終わります。どうも長い時間、御清聴ありがとうございました。

(第二部終了)

第15回世田谷区子ども読書活動推進フォーラムの報告

発行 世田谷区立中央図書館

〒154-0016

東京都世田谷区弦巻3-16-8

電話 03-3429-1811

FAX 03-3429-7436

発行年月 令和3年 月

広報印刷物登録番号 No.